吉本へのコメント（戸谷）、『倫理学論究』、vol.1, no.2, (2014), pp.44 -45

吉本陵「ハンス・ヨーナスの生命の哲学――『像（das Bild）』概念をめぐって」へのコメント

戸谷洋志[1]

吉本陵氏(以下、吉本と略記)の発表「ハンス・ヨーナスの生命の哲学―「像 Bild」概念を巡って」[2]は、ヨナスの像概念を紐帯に『生命の哲学』と『責任という原理』を結びつけ、両者を新たに捉えなおそうとする試みである。『生命の哲学』が『責任という原理』の理論的な基礎となっていることは周知のことであるが、『責任という原理』において明示的に言及されるのは『生命の哲学』の中のごく一部、特に第五章の物質交代の議論である。これに対して、吉本の試みは、像概念を両思想の蝶番として際立たせることで、「像」がヨナスの思想全体を響かせる鍵概念であることを浮き彫りにしている。

『生命の哲学』と『責任という原理』の連関を主題とした先行研究は少なくない。そうした研究において言及されるのは、主として目的論である[3]。これに対して、吉本ほど踏み込んで『責任という原理』のうちに「像」概念を探究した研究は管見する限り存在せず、その意味で、吉本の研究はヨナス研究の新たな可能性を開くものとして評価されるべきである。

以上を踏まえた上で、筆者からは二つの質問を提示したい。

第一に、吉本はヨナスの『生命の哲学』における「『天上にいる地上の人格の分身』という比喩」(36 頁/55 頁)を『責任という原理』における「人間という理念」に接続させている。両者は、「像を媒介にした反省的な自己認識」(35 頁/55 頁)の所産であり、その限りにおいてともに図像能力をめぐる哲学的生命論のうちに理論的基礎をもっている、ということが、

---

[1] 戸谷洋志（とやひろし）。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程。

[2] この発表は、2013 年 7 月 20 日に開催された第 20 回関西大学生命倫理研究会（於関西大学）で行なわれた。このコメントは、本号、49-56 頁に収録された当日の発表原稿にたいするものである。吉本からの引用の箇所については、本文のかっこのなかに本号の当該ページを記す。

[3] こうした先行研究の代表的なものとしては、Hösle, Vittorio, “Ontologie und Ethik bei Hans Jonas”, *Ethik für die Zukunft, Im Diskurs mit Hans Jonas*, Böhler, Dietrich(Hg), München, 1997, SS.105-125. や、Müller, Wolfgang Erich, *Hans Jonas; Philosoph der Verantwortung*,WBG, Darmstadt, 2008 などが挙げられる。

吉本の主張である。確かに、「人間という理念」は人間の図像能力の所産である。しかし、「『天上にいる地上の人格の分身』という比喩」と「人間という理念」には著しい違いがあるし、両者を混同すればヨナスの責任倫理学の理論を破綻させてしまう恐れがある。というのも、「『天上にいる地上の人格の分身』という比喩」があくまでも「私の似姿」であり、「つまり自分自身の状態と振舞い」(35 頁/55 頁)であるのに対し、『責任という原理』における「人間という理念」は責任の対象であり、そして責任の対象は他者でなくてはならないからだ[4]。もし、「『天上にいる地上の人格の分身』という比喩」と「人間という理念」を安易に混同してしまえば、自分自身に対して責任を負うというヨナスの責任倫理学の主張からかけ離れた帰結を許すことになる。この点については、吉本の主張を維持しつつ整合的な解釈を行うことは可能だろうか。

第二に、これも第一の主張と同様の論点になるが、たとえ「『天上にいる地上の人格の分身』という比喩」と「人間という理念」を同じ像概念の展開として捉えるのだとしても、「『天上にいる地上の人格の分身』という比喩」がもつ倫理的な比喩と同じ意味で、「人間という理念」が責任の対象になると捉えられているのならば、それはヨナスの責任倫理学の理論を破綻させる恐れのある解釈である。というのも、「人間という理念」が責任の対象となる理由は、あくまでも責任という概念一般の可能性の条件を維持することである。つまり、地上において責任を引き受けうる存在者が存続することが、「存在論的な責任」[5]として人類に課せられるのである。これに対して、「『天上にいる地上の人格の分身』という比喩」がもつ倫理的含意は、あくまでも現代の価値観においていかにして不死性を保証するか、という実存的な要請に基づいている。そうである以上、筆者には両概念の倫理的概念が同様であるとは見なし難い。この点について、なお両概念の連関を説得的に説明することは可能だろうか。

---

[4] cf., Jonas, Hans, *Das Prinzip Verantwortung: Versuch einerEthik für die echnologische Zivilisation*, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 2003(1979), S.166.

[5] ibid., S.91